

り、また恒常的な勤務による安定兼業者が農家世帯で増加していること、また、今後は、最大世代である「団塊の世代」が数年後に定年を控えていることから、今後の地域農業における担い手として再生産が可能であることを明らかにしている。

これらは、地域農業の担い手が減少し高齢化が進む中で、担い手である高齢者の活動の場が十分整備されず地域農業が後退局面にある地域において、それを再建するための検討材料たりうるものと思われる。

今後、高齢化が一層進む中では、高齢者の「自立」が極めて重要な意味を持つ。しかしそれは、単なる政策的インプリケーションによるものではない。本報告で指摘する「高齢者が経済行為の担い手になる」という「高齢者の自立」を示す事象が、単に年金等社会保障費の削減の論拠として表現されるのだとしたら、それは筆者の本意ではない。そうではなく、今後の高齢社会における高齢者の自立によって、高齢者と非高齢者が、対立でも、依存や施しでもないパートナーシップを組むという「共生」的な関係性を実現するとともに、すなわちそれが、一人一人の人間が文字どおり「生きる」ことの尊重につながり、今後の社会のあり方のメルクマールになると考えるのである。そしてそこでは、高齢者と非高齢者の両者がお互いをどのように認めあい、対等な関係をつくって問題を調整していけるかが重要になる。それは、ネットワーク的な社会の基礎となる関係性であろう。

これからより高齢化が進む中では、かかる高齢者の主体的な取り組みとともに、「定年帰農」にみられる多面的なライフスタイルについては、様々な視点から分析すべきポイントとなる。

*) 高橋 巖 (2002) 『高齢者と地域農業』家の光協会

千葉集会 / 第 6 分科会 /

「元気やさいネット」と「とらため農業協働組合」のこと

片柳義春

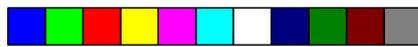
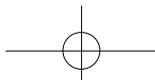
(元気やさいネット・やまと/とらため農業協働組合代表)

1. 「市場」の復権運動としての「元気やさいネット」

何じゃ、この低い自給率は？ 農薬にまみれた食べ物を食べと言うのか？

現在の農業は非常に厳しい時代を迎えています。輸入農産物がどっと押し寄せ、自給率がわずか 30 パーセント台しかありません。この自給率はアフリカや砂漠の飢餓地帯の自給率です。さらに輸入農産物からは高濃度の農薬や日本で使ってはいけない農薬が検出され、問題になっております。国内でもまたしかり。先進諸国に較べて単位面積あたりの農薬使用量が 10 倍という日本の状態はかなり危ないと言えます。

例えば私が以前農家向けの雑誌を販売していたときの事です。あるキュウリのハウス栽培農家を訪問したとき、2 歳ぐらいのヨチヨチ歩きの子どもがハウスの中からキュウリをかじりながらでてきました。それを見るや否や母親が血相を変えて子どもを逆さにして、飲み込んだ物を全て吐き出させていました。こんなキュウリを私たちは知らずに食べているのです。農薬をまいている農家の方もかなり非道い状況です。先日知り合った有機栽培の農家の方は、若い



ころ農薬が原因で失明する寸前までになったそうです。視力がドンドン衰えてきて、これは大変だと言うことになり、あちらこちらの病院を回ったけれども原因がつかめず、最後に北里病院で農薬が原因だと判ったそうです。北里の眼科の診療室に入るや否や、「あなた農家でしょう？」と言われたそうです。家中の農薬を病院に持ち込み、薄い液を皮膚に注射してようやく3種類の農薬が原因であると突き止めました。そのうち二つはデナポンとオルトランというかなりよく使われる「強くない」農薬でした。私自身も田んぼの除草剤や種子の殺菌剤や先ほどのオルトランでかなり非道い目に遭っております。このような危険な化学物質を日常的に使っているのは塗装屋さんと農家ぐらいではないかと思っています。

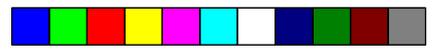
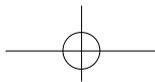
出発点は「こんな物を家族に喰わせられるか！」

「こんな物を家族に喰わせられるか」と言う想いで、有機農業に関心を持ち始め、若い頃、自給菜園では無農薬栽培に取り組みました。近所の農家の方からは「農薬を使わないで、出来るわけがないよ」などと揶揄されましたが、そういうことを言っている農家も自家用の畑では無農薬栽培を行っておりました。

要するに「市場」で高く売れる「見栄えの良いもの」を作ることを目指しているのが、今の一般の農業のあり方です。これに対して30年ほど前から有機農業を目指す人々が現れました。特に有吉佐和子の「複合汚染」と言う本がでてから、急速に農薬問題に関心が集まり、一時はパニックのようになって、主婦が有機野菜を求めて、右往左往した時代が一瞬ありました。私も高校生の頃から自宅の畑で野菜を育て、ニワトリを放し飼

いにしていましたが、「複合汚染」が話題になるや近所の奥さんたちが押し掛けてきて、栽培途中の野菜までもみんな持って行ってしまう事件がありました。日本人特有の熱しやすく冷めやすい体質ですぐに、有機野菜の騒動など終わってしまいました。その後「偽装有機」農産物が氾濫して、少しでも鶏糞を肥料にすれば「有機」であるなどという状態になり、いかにも日本中に有機栽培農家が出現したような錯覚に陥りました。この状態はJASの有機認定制度が出来て、なんとか一段落しました。しかし偽装が氾濫したおかげでまじめな有機栽培農家の信用も地に墜ちてしまいました。農産物の「偽装」問題は根深く、たとえスーパーの有機野菜販売コーナーや生協や安全食品の業者などから買っていたとしても危ないです。これは、農産物を大量生産可能な工業製品と同じように、生協やスーパーや大規模な安全食品流通業者が大量生産・大量輸送・大量販売の仕組みを持ち込んでいるからです。

多くの農家との対話の中で、いつまでにどれだけの野菜を持ってこいという契約を結び、それに違反するとペナルティが科せられ、取引を打ち切られると言う状態にあるときのプレッシャーのすごさを幾度となく聞かされました。農産物ですから天候などに左右されて、荷がどうしてもそろわない時がでてきます。その時に何処からか判らないように紛れ込ませることを日常的にやっているという話を聞きます。こうしたことがBSE(狂牛病)事件や中国の農薬漬けほうれん草事件、国内の無登録農薬の使用事件ではっきりしてきて、もうみんなバレてしまった訳です。薄々感じていたことがやっぱり本当だったのかぁと言うのが普通の人の気持ちではないでしょうか？また、現在の非道い不況の中、失業・ホームレス・自殺が蔓延している状態で、特定の間人だ



けがズルをして儲けてやろうということは許さないという雰囲気があります。これまではうやむやにされていた原発の事故隠しなどももう出来ない状況が生まれつつあります。世の中の風向きが大きく変わってきたと思います。

流通の仕組みを自分たちで作らねばまともなものが食べられない！

大量生産・大量輸送・大量販売から見捨てられた人々がいます。小さな家族経営の農家、小さな地元の市場、町の小さな八百屋さん。ドンドン潰れています。数のそろえない小さな農家や小さな市場を切り捨てるスーパー、大生協。巨大な流通の流れからどどん人々がはじき出されていくのです。そして何よりも排除されているのは「まともなものを喰いたい人間」です。私たちは「まともなものを喰う」ために自前の流通を考えねばならないのです。(大手の有機食品販売業者も本当のところは信用できません。)一方で、神奈川県内には有機栽培農家が点在しています。しかも80年代前半の有機農産物ブームが下火になり、会員数が減って苦しんでいる家族経営の農家や販売先がなかなか開拓できない新規就農者たちです。そして他方で私たちは「まともなものが喰いたい」と望んでいるわけです。この両者を結びつけるのが本当に求められている流通ではないでしょうか？

ところで現在会員制で有機野菜を宅配している流通業者があります。これらの流通業者も会員数が1万人を越えるような規模の大きなものとなり、生産者の間ではかなり悪い噂が飛び交っております。規模が大きくなれば、スーパーや生協と同じように大量生産・大量流通・大量販売となり、小回りが利かない状態になり、それ故に無理が生

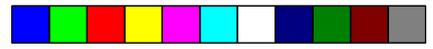
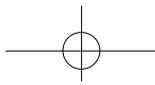
じ、偽装の温床が生まれてくることとなります。

かつての流通にも様々な問題があったわけで、礼賛するつもりはありませんが、例えば台風でほうれん草畑が水浸しになってしまい入荷量が極端に減って、市場の値段が1把300円以上になったとします。このとき町の八百屋さんは市場から仕入れるでしょうか？ 買い物客に日常接している八百屋さんですから、こんな高いものを買ってくれるお客さんがいないなら、絶対に仕入れません。そして自分のお店では、ほうれん草を買いに来たお客さんに、今日は台風で荷が入らなかったと説明して、代わりに大根、人参、ゴボウが安いから「煮っ転がし」にしたらあ、などとアドバイスするはずですが。ところがスーパーや生協や大きな野菜宅配業者は一ヶ月前から宣伝をうっているのに、何が何でも売らなきゃならない、バイヤーは顔を真っ赤にして怒鳴り散らしたり、真っ青になって胃薬を飲む事になります。結局下請け企業化した農家に何とか揃えさせるわけですが、ないものを出せと言われても、魔法使いではありませんから、どこから集めてくる事になります。このような事が常態化している既存の流通システムを私たちは使いたくありません。

販路がなくて困っているまじめな有機栽培農家と食べ物に不安を抱き本当に安全なもの求めている消費者とを直結するシステムを作ろうという事で、この「元氣やさいネット・やまと」を構想しました。

「消費者」というグローバリストの畷と「生費者」という考え方

たくさんの農産物や工業製品が「消費者の利益にかなう」という名目で、海外から入ってきます。



これらは多国籍企業化した日本や外国の企業によって行われています。そして経済のグローバル化が豊かな社会を導くような宣伝をしています。果たして本当でしょうか？私たちの周りには、失業者やホームレス、自殺者、半失業状態のフリーターが溢れているではありませんか？こんな時代が今まであったでしょうか？文明が進んで行けばバラ色の未来が待ち受けていると子どもの頃から信じ込まされていましたが、実際に目の当たりにしているのは一部のお金持ちと大多数の貧しい人に分かれていく社会です。確かに億ションや高級車を買う人たちもいます。方や、小さな公園にもホームレスがあり、大きな公園や河川敷にはたくさんのブルーシートの屋根が並ぶ様は尋常ではありません。自殺者が交通事故の死者の3倍もいるのが今の社会の姿です。本来社会とはお互いに助け合っていくコミュニティのはずです。そして人は「消費者」としてのみ生きている訳ではなく、「消費者」でありながらかつ「生産者」として生活しています。人件費が日本の30分の1～10分の1という中国などから入ってきたものが市場を席卷していきます。「消費者」として安い製品は助かりますが、「生産者」としては自分の仕事が奪われてしまいます。一次産業のみならず、物作りの二次産業やコンピュータなどの三次産業までもが仕事を失いつつあります。収入が少なくなったから、安い外国製品を買う、そうするとまた仕事が減り、収入が減る、その結果安い外国製品をもっと買うようになる、と言う悪循環に陥っています。こうした悪循環に対して「経済のグローバル化」を推進する人たちは、無慈悲にも「市場の原理」という名目で「市場から退席願います」という言葉を返してきます。彼らのいう「市場」とは何なのでしょう？バブル経済を作り上げてはブッ壊し、

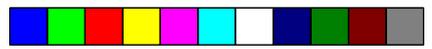
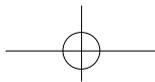
世界の通貨をもてあそび、穀物や技術や資源を独占する一握りの人たちに翻弄されてきたのが、20世紀の私たちの暮らしではなかったでしょうか？「国益を守る」と言う大義名分で見も知らぬ恨みもない人々同士が殺し合わねばならなかった、今も殺し合っている「仕掛け」または「罠」に私たちははまっているのではないのでしょうか？

この仕掛けから脱出する方法として、まず自分たちが「消費者」ではなく生産もしている「生費者」と言う考え方に立ち戻って下さい。そして自分たちのコミュニティの中にそれぞれの過不足分を融通しあう「自分たちの市場」を作ることと考えて欲しいのです。

フリーマーケットが発想の原点

わたしたちの出発点は生活クラブ生協の会員が始めた「クラブマーズ」という小さな地域通貨のサークルでした。これは自分たちの不要になったものや特技などを地域通貨で交換しようというフリーマーケットの発想でした。まさに小さな「私たちの市場」に他なりません。この市場では原則として「クラ」という手帳方式の地域通貨を使おうという約束事があります。僕自身は何回かフリーマーケットに行って「フリマのプロ」という人たちに嫌な思いをしていたので地域通貨なら素性の知れない変なプロが紛れ込まなくていいなあと思っていましたし、何よりも大事な休日を潰さなくても、また高い所場代を払わなくても良いのが嬉しかったのです。しかしこのような面白い企画にもかかわらず、みんなの中に定着するのが非常に難しい事でした。「頼りにされる」あるいは「あてにする」市場としてはややインパクトが不足していました。

このグループが出来た頃、私は無農薬で



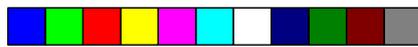
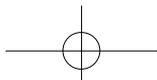
花のポット苗を育てることに夢中になっていました。この苗を育てるのに大量の堆肥を作っていました。私の住んでいる中央林間という町はもともと小田急が戦前に開発した文化村で、かなり面白い人が住んでいます。その中でも高層マンション建設に反対していた人で、多胡さんという方がおりました。この方はなんと3000坪もの敷地のお庭と茶室を地域の緑を残すために生前に大和市に寄贈されたのです。この方とは少し面識がありましたが、まさか市に寄贈して下さるとは思ってもいませんでした。ところが市に寄贈されるや否や、付近に住んでいるヒステリックな人から、落ち葉がひどい、毛虫が非道いなどというクレームが大和市にジャンジャン来るようになり、市は美しい桜並木の枝を道路からはみ出している部分をブツブツきり、さらに奥の木立もバサバサと切り落としました。落ち葉もビニール袋に詰め一般のゴミと一緒にお金を払って清掃車に持って行かせていました。これはもったいないし、故人の遺徳を踏みじめる行為だと思い、「俺が落ち葉かきをするから、捨てないで欲しい」と市に頼み、4シーズンほど前から11月から2月までの休みの日を全てつぎ込んで落ち葉かきをしておりました。子どもと遊ぶ時間すらなくなってしまったので、困っておりました。昨シーズン、「クラ」という地域通貨のグループが出来たので、ものは試した、家の花苗のうち出荷できそうなワスレナ草の苗を350株ほど地域通貨で売って、稼いだ地域通貨で有償のボランティアを集めようと思いましたが、その結果は素晴らしいものでした。12月の半ばに大人子ども十数名が集まってきて、わずか1時間半で2月までかかって集めていた落ち葉をきれいに集めてしまったのです。このことは、落ち葉かきをして稼いだ地域通貨で、サツマイモが買えるなら、地

域通貨で「生きていける」あるいは「喰っていける」事を意味します。これはすごい、一次産品とりわけ食べ物が地域通貨で動くようになれば、地域通貨の重みが非常に増します。そして「ぼくたちの市場」というものが視野に入って来ました。

市場のイメージはよくテレビにでてくる様なアジアやアラブのバザールといった感じでした。コミュニティを再構築しようとしたときその参加者各々が全て自給自足をしている訳ではありませんから、それぞれの過不足を補いあうための「市場」というものが必ず必要になってきます。「市場」というと市場原理主義者やグローバリストらの悪いイメージを持たれる方が多いと思いますが、私たち普通に生活するための本来の「市場」を再構築する必要があります。これを目指しているのが、私たちの「元気野菜ネット」であります。現在は主に野菜を扱っているので、この名称を使っておりますが、将来きっと名称が変わると思います。

有機農業運動 × 地域通貨運動 × 生活クラブ運動 = 元気やさいネット

以上のような下地の上に有機農業運動と地域通貨運動と生活クラブの運動が集まって出来たのが私たち「元気やさいネット・やまと」です。各運動がそれぞれに壁にぶつかっていました。有機農業運動では、先に述べたようなブームの下火で会員さんが減り続けたうえに、「産消提携」で消費者が農家を助けて、除草剤を使わない分発生する草むしりの仕事を手伝ったり、出荷や配送の仕事を手伝うということが、バブルに時代「消費者は神様」という洗脳まがいの宣伝の中で忘れ去られていきました。また地域通貨運動も、かけ声ばかりが先行して中身は伴わずにじり貧という運動もあります。



生活クラブでも会員が高齢化し、新しい若い世代が入ってこないなど頭が痛い状況が続いています。

こうした状況の中で地域の安全で新鮮な有機野菜を地域通貨で食べられないかという事に取り組み始めたのが私たちの元気やさいネットです。インターネットはこれまであまり横のつながりのなかった活動を結びつける大きな変革をもたらしました。マスコミに採り上げられなければ、活動が広まらないというかつての状態から「横議横結」を容易にして、市民レベルでいろいろな情報や議論やりとりされ様々な共同作業が可能となりました。最近の事例をあげますと、信州のある有機栽培農家からダイコンが残ってしまって困っている、もうすぐきつい霜が降りるので何とか助けて欲しいという話が有機農業研究会の会員のルートを使って流れてきました。その農場は今年の夏に農園主がトラクターの横転事故で亡くなられ、女将さんと、研修生でやりくりしていたのですが、いろいろな作業が遅れてかなり厳しい状態にありました。私たちの元気やさいネットやクラブマーズのメーリングリストでこの情報を流すと、隣の「町田・大福帳」という地域通貨のグループや「あおば」という相模原の地域通貨グループ、大和市内の自然保護グループ、で大田区久が原の公園を市民が自主管理する活動をしているグループにも情報が伝わり、一週間もせずに400本以上の注文が集まりました。これは狭い意味での地産地消ではありませんし、地域通貨も使えませんでした。今後はこうした中山間地や過疎地で地域興しや環境保護をしている有機栽培農家や林業家や工芸家を支えていく活動も視野に入れていきたいと考えています。

余談 ガーデニング・ブームのこと

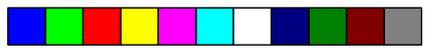
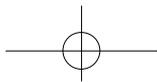
数年前ガーデニング・ブームが日本中をおおっていましたが、テレビにでてくる「ガーデン・デザイナー」とか「コーディネーター」と称するお姉さま方が、あたかも洗濯機に粉石鹸をサラサラと入れるがごとく、オルトランなどの農薬を土に混ぜ、殺虫剤をシューシュー吹き付けているではありませんか？こりゃ、ひで〜！！と思わず叫びましたが、先にも行ったように熱しやすく冷めやすい日本人の体質で、もうガーデニング・ブームは終わってしまいました。当時はホームセンターなどでも農薬の大きな袋を買い込んでいく女性を多く見かけました。折角身のまわりに緑を取り戻そうとしているのに、逆に農薬という毒物を生活空間に取り込んでしまっていたのです。これではまずいと思い、オーガニックガーデンを勧めようと思い立ちました。欧米ではオーガニックに庭造りをする事は普通であり、イギリスのガーデニング雑誌には、インタビュー項目として「あなたはオーガニックを指向していますか？」という設問が入っているくらいです。

それから友知り合いが冗談半分に「恐怖の市民農園」という本を出したいな、と言っています。これはどういうことかということ、現在、市や区で貸し出されている市民農園の農薬使用がめちゃくちゃで怖すぎるという実体があるからです。生半可な知識で農薬のような毒を扱っているわけですから、これはたまったモンじゃありません。

2. 働き方を考え直す。

とらたぬ畑が働き方を変える！

これまでは流通のことを取りあげてきましたが、実はぼくたちの働き方や生き方も



大きな変革の時期に来ていると思います。たくさんの方が仕事を失っています。またこれから増えるであろうと思われるのが「ワークシェアリング」です。少ない仕事を分け合います。しかし週のうち何日かは仕事がない状態になります。ところがどうでしょう、私たちの周りには耕作を放棄されて荒れ放題になっている農地があるではありませんか？

「食えない、食えない」と言っている人たちがいる一方で文字通り食べ物を育てる事の出来る空間が捨て置かれているのです。550円のパンを飛ばらおうとして、どうか東京駅のパン屋の店長を刺し殺さないください。と私は言いたい。食べ物が欲しければ畑で作ればいいのです。畑がなくても近所の農家で草むしりでもすればありがたいでご飯ぐらいは食べさせてくれます。食べ物を作っているということの本当の強さが今のような大不況の時期に見直されるべきです。とりわけこの産業社会に依存してきた普通の人が失業して、仕事を失ったとき、一体どうすればよいか、政府は実際答えを持っていません。私たちの政府は日本という大くりのコミュニティの外観を持っていても本来の任務はとっくに忘れているか、最初からそんなことは考えていなかったと思われる。「市場」が一部の人たちに乗っ取られてしまったように、「政府」もまた特殊な利害を持った人たちに乗っ取られてしまったような気がします。35歳を過ぎると働き口が少なくなり、40台50台となるともう再就職が至難の業と言えます。私たちはいらなくなった機械のパーツのように産業廃棄物として「市場」のそとに投げ出されてしまうのです。現在の産業社会の中で企業に雇われてサラリーマンとしてしか生きていけない人は、スタインベックの「怒りの葡萄」にでてくる人々のように生きて行くし

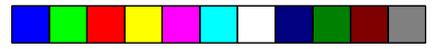
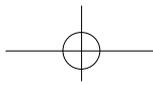
かないのです。私はもうこの「雇う」「雇われる」という関係にうんざりしています。あるいは元請けと下請けの関係にもうんざりしています。もっと対等な立場で仕事が出来ないものではないのでしょうか？「怒りの葡萄」でくるような卑屈な働き方しか出来ないのでしょうか？

この様な状況で仕事のない人たちが集まって助け合いながら荒れ果てた土地を耕して自分たちの食べ物を栽培し、余ったものを自分たちの「市場」で欲しい人と交換しようという発想で生まれたのが私たちの「とらぬ狸のイモ畑」(通称とらぬ農場)です。

時間は平等。「とらぬ狸のイモ債券」の話

食べ物を自給することを目的に始めた農園ですが、もちろんはじめから全て自給することなど不可能です。そこそこのものを可能な限り自給を目指そうとしています。そして今、様々な形で様々な都会人が農業生産に関われる仕組みづくりを試行錯誤しているところです。都会人といっても様々です。男の人の多くは平日の昼間働いているので休日の昼間しか畑に来れません。共稼ぎの女性の場合もこれに近い状態です。専業主婦の場合はもっと自由がきくでしょう。夏休みしか参加できない人もいますし、平日の午前中しか参加できない人もいます。かくいう私も休日しか参加できないのです。このようなまちまちの時間をまとめ上げて、ひとつの農場として機能させるには、ここでもインターネットと地域通貨とその変種の労働債券「とらぬ狸のイモ債券」が役に立ちます。

とらぬ債と呼んでいるこの債券は、市民ベンチャー事業をやり易くする道具です。どれくらい収量があるかも判らない農業生産を行うにあたって、たとえ地域通貨で

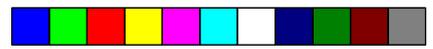
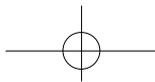


あっても1時間あたり何百円という賃金を払ってやることは主催者がかなりのリスクを背負い込むことになります。それに「雇う」「雇われる」という関係が生まれてしまいます。それよりはみんなが対等な立場で参加してその成果を分け合い、リスクも分け合うやり方の方が参加者のモチベーションは高まり、「三人よれば文殊の知恵」と言うようにいろいろなアイデアが生まれ豊かな人脈がいきます。巨大な会社とは違って、資金も何もない市民グループですから大企業とは違ったやり方を考えねば太刀打ちできないでしょう。「とらたぬ債」は海賊や山賊みたいな「山分け方式」にはもってこいのやり方です。この債券には60MIN、30MIN、15MINという3種類があって畑で働いた時間分を事務局からもらえる仕組みになっています。1時間働くと60MIN1枚。3時間45分だと60MIN3枚に30MINと15MIN各1枚という具合です。トラタヌイも畑の場合3畝半にの畑に700本あまりのさつま苗を植えました。土地を借りる手続きから、うねたて作業、草取りや収穫まであわせて108時間+アルファで現在集計中です。全体の収量も最終的にまだ集計中ですが、全体収量から苗代やその他の経費を働いてさらに来年の種芋分も引きます。その残りを「とらたぬ債」の額面の労働時間の総和で割り、60MINあたりの芋の収量をはじき出します。この割合で各自の債券時間分のサツマイモを分配するという仕組みでした。ところが現実には収穫期に幅があり、全収量が確定する前から、少しずつ収穫していきます。そこでこの分は「仮払い」ということにして、最終的に収量が確定した時点で地域通貨で精算しようということになっています。さらに来年度からは栽培品目が20種類を越えるので、とりあえず収穫分は、世間並みの相場を基準にして、とらたぬ農場の事務局に地域

通貨で支払うことにします。すると事務局は地域通貨がごっそりたまってきます。年に2回盆暮れに精算をしてとらたぬ債券分の地域通貨を分配しようと考えています。こうすれば何十種類もひとつの畑で共同で栽培しても不公平が少なくできると思っています。

インターネットも大事な道具です。私は畑の情報をメーリングリストでしょっちゅう流しています。本当は独自のホームページを持っていけば良いのですが、今製作中です。これを見ればいつどんな仕事があって、人が足りないのか余っているのかも知らせることが出来ます。実際に行けない人でも農場に対する常に共通理解が出来ますので、本当に役に立ちます。

ところで「能力主義」を標榜する現代の「市場原理主義」に洗脳されている人には納得のいかないことばかりでしょう。何で力のない女性や子どもたちと体の大きな若い男が1時間働いても同じ60MIN1枚なの？これについては正直悩みました。現在もまだ曖昧ですが、「エンデの遺言」を執筆された森野栄一さんに尋ねたところ、「時間は平等」という答えがすぐ返ってきました。確かに世界には1分で何十万円も稼いでいるといわれている人もいれば、限りなく0円に近い人もいます。同じ時間働いてもこのような余りにもおおきな違いがあることの方が変な気もしてきました。農業に従事する人は時間あたりの評価はとっても低いのです。かたや銀行などで働いている人の評価はさぶる高いですね。かつて60パーセントもあった農業人口は今や3パーセントになっています。当然のことのように思えます。この辺の理屈を僕なりに考えてみました。それは相互扶助という考え方です。誰でも子どもの時は力が弱いけれど、伸び盛りで家計は厳しい。また年をとればとるで体のあつ



ちこっちにガタが来て、病院通いの費用も大変だ。そういう面倒をみんなで助け合うために能力以上の分配を子どもや老人たちにして行くのが「時間は平等」のやり方という風に説明しています。自分に子どもが産まれたら、とか年をとったときのことを考えてみなさい。と僕はいつも言っています。とらたぬ債は「相互扶助」という本来経済が持っていた機能を復活させようという願いが込められているのです。

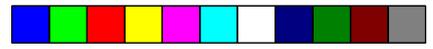
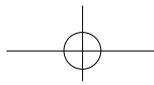
有機・協働・相互扶助

とらたぬ農場は一言でいえば、都会人が力を合わせ助け合いながら有機栽培で安全な食べ物を自給しようとする農場と言えます。この試みは今の社会からはじき出された人々のセーフティネットとなりますし、これまでの有機農産物が高価で庶民の手の届かないものだったのに対して、普通の人々が食べられる価格にして、農産物と言ったらオーガニックが当たり前という状況を作っていこうという野望が潜んでいます。「半農半X」といういい方がはやっていますが、まさにとらたぬ畑はこれを実現するための農場です。積極的な兼業農家であり、今まで都会的な産業に両足をのせていた人が、片足を農的な生産にずらしていこうという動きです。現在は第3次田舎ブームですが「ダッシュ村」の影響もあって簡単に田舎で暮らせると勘違いして非道いことになっている方をあちこちで見かけます。農業を甘く見て、気力さえあれば何とかできている方も多いのではないのでしょうか？農業をやるということはひとつの事業を興すことであり、他の産業とその意味では変わりません。突撃していく人たちの前には丘の上の巨大な要塞が待ちかまえているのです。現在の状況は203高地状態と言え

なくもありません。そこそこの準備や作戦を練る場所が必要です。とらたぬ畑はその様な新規就農希望者にとっては訓練の場所を提供します。2～3反の農場は勉強するには手頃な広さです。ここでしばらくやってみて、ある程度の自信が付いてきたら本格的に自分の農場を開くということもできます。中には生業として農業をやっていこうという人がでてくるかもしれません。私たちはその様な可能性を秘めた農場を作っていきたいと考えています。

3. そもそもの始まりから

もともと私自身は若い頃から「農」の世界に魅せられ、大学を卒業した後、もう一度農業大学で勉強をしようと考えていたほどです。ある事件がきっかけで、高校に行くのが嫌になっていた時期がありました。ベトナム戦争の映像や水俣の悲惨な映像を見て、社会に対する不信が心の中で渦巻いていました。そんなときに自分を助けてくれたのが「農」の世界でした。努力をすれば必ず報いてくれる正直な世界、人のものを横取りしたり嘘をつかないで済む世界に出会ったという感じでした。16歳の時から麦を播いたり、野菜を育てました。ところが家庭の事情やら何やらで、農業大学にも行けず仕舞いでした。大学を卒業した頃は第2次オイルショックの後で低成長期にはいると信じられていましたが、なんと政府は中曽根バブルを起こしてしまったのです。田舎で土地を探してみようと思いましたが、2倍3倍と跳ね上がる土地を手放したり、貸したりする人はいませんでした。こんな状況で父も病気がちでしたので、(一時農業関係の雑誌社に勤めていましたが、)まあ少し金でも貯めようという思いで家業に従事してありまし



たら、今度はパプルの絶頂で父を失い、莫大な相続税を課せられ生涯に渡り国家の債務奴隷ということになりました。パプルによって2度も自分の夢を踏みにじられ、さらにこの大不況でもう人生の電源ボタンを切ろうかと思っていました。ここで、また私を助けてくれたのが畑でした。小さな自宅の畑に願いをかけました。どうか死ぬ前に自分に最後の力を与えて下さい、と。すると数日後、私が若い頃に畑を耕している姿を見て感動し、農業高校に進み、今農業大学で仕事をしている人に十何年かぶりに道で会いました。正確に言うとその人の車に轆かれそうになったのです。彼はいまだに農場を持ちたいと地方を探しているそうです。う～ん。そうだったのか～とひとしきり感慨にふけりました。僕が若い頃彼に与えた火を再び彼から自分に返してもらったこととなります。消し炭のような私に再び火をつけてもらったのです。今年でもう45歳です。残りの人生(30年あるでしょうか)は自分の若い頃やりたかったことをやってみたいという気持ちになりました。そうこうするうちに、神奈川県農業大学で中高年を対象に新規就農の研修コースを開くという情報が入り、面接を受けたら合格してしまいました。また県の環境農政部が来年からホームファーマー制度という耕作放棄地を市民に貸して復興させる事業を始めるという情報が入ってきたので、問い合わせたところ、地域通貨を使い協同でやるというのが目を引いたらしく運良くモニターとして採用され、今は相模原で「とらたぬ畑」をみんなで耕作しています。ホームファーマーで生産されたものは円通貨では売っては行けないという規制があります。このために私たちは地域通貨が使える市場として注目されているのです。

畑に願いをかけたのが良かったらしく人

生のリセットボタンを押したような結果になって今日に至っております。先の「元氣やさいネット」構想も大和市の方で面白いから経済産業省の市民ベンチャー事業助成に応募したらというアドヴァイスを受け、申し込んだらなんと通ってしまったという強運の事業です。

公園の落ち葉かきを地域通貨で始めてから今までわずかに11ヶ月。自分の力というよりは、時代の流れに乗ってしまった、あるいは押し出されているというエネルギーを感じています。時代は大きく変わっています。かつてルネッサンスが「暗黒の中世」から生まれたように、ぼくたちがやっていることは「暗黒の近代」からの脱出を試みているルネッサンスの運動ではないかと最近しています。折しもイタリアから、「スローフード運動」が全世界に広まろうとしています。これなどを見ているとただ今のルネッサンス運動もやはりイタリアから始まっていくのかという不思議な印象を持っています。

21世紀が20世紀の負の遺産を背負ったまま何の変革もなくただらと続いていくことに対してもう我慢できないというのが私の正直な気持ちです。

以上



とらたぬ畑のイモ債券 (5 min)

